様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 １３ 日現在

機関番号：１７５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０３１１

研究課題名（和文）イギリス国民意識形成に果たすイギリス文学の公共的性質の研究

研究課題名（英文）The Public Nature of English Literature in Relation to the Formation of the British Nationhood

研究代表者
園井　千音（Sonoi, Chine）

大分大学・工学部・准教授

研究者番号：７０２９５２８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はイギリス文学がイギリス国民意識の形成にいかに寄与したかという認識について多面的に分析し、その影響力の本質を明らかにすることを目的とした。具体的には（１）文学的主題と社会変革との関連が顕著であるロマン主義時代文学と国家主義台頭との関連、（２）19世紀イギリス文学と宗教的懐疑の関係、（３）20世紀イギリス文学における宗教的主題の揺れ、またイギリス社会思想におけるコモンセンスの性質を総合的に分析し、ヨーロッパ近代社会においても特色あるイギリス国民意識の構築的性質とイギリス文学における複合的特質とその主題の方向性を検証した。

研究成果の概要（英文）：The study aims to elucidate the interrelationship between the subject matter of literature in Britain and the formation of nationhoodof the British people from the 18th to the 20th century.
It is inaccurate to define the nature of the change in the British nationhood which occurred in the process of the modernisation in society and culture since the seventeenth century merely as historical necessity because implicit themes of cultural sciences, particularly those of humanities and literature played critical roles for British people in making them aware of their national sensibility of the British nation. This nature of literary output might be called as the“public nature”of English Literature.I intend to clarify how the public nature of literature worked to give positive influences on the people's perception in which their sense of nation was established from the 18th and the 20th century British society that involved a diverse development in social system.

研究分野：英文学

キーワード：英文学　西洋思想史　宗教　西洋哲学　ヨーロッパ歴史

１．研究開始当初の背景

(1) イギリス文学は第一に国内外危機、政治的動乱において国家的混乱や社会的政治的不安及び思想的混迷を契機に成立し、その芸術的主題としての理想主義、宗教的信念、道徳的特質の複雑な感覚を内包すること、第二にその道徳的構築力をその公共的主題として伝え、国民もしくは国家意識形成と関連する機能を果たすことが明らかになった。このことについては、科学研究費助成による平成16年度終了の「イギリス文学における人種問題とヒューマニズムの限界に関する研究」及び平成19年度終了の「イギリス文学における国家意識と道徳的主題の研究」、また平成22年度終了の「イギリス文学における文化形成と宗教的主題の研究」において特に17世紀から19世紀イギリス文学においての検証と分析を進めた。

(2) これまでの研究において、イギリス文学における道徳的宗教的主題は例えば、17世紀のアンドルー・マーヴェル、ドライデン、ミルトン等の政治的宗教的作品において、国家批評、あるいは教育的意味において国民意識を構築する効果を与えたこと、また18世紀末から19世紀初頭にかけてのロマン主義時代において、危機的な政治的場面、例えば、共和主義思想の失敗、国家主義の台頭との関連において露呈する理想主義的理念の矛盾と葛藤を解決しようとするものとして存在することが証明された。このようなイギリス文学における伝統的主題は、18世紀以降、社会的政治的混乱、ダーウィニズムの衝撃、科学的発展、思想的変革、その他近代化に伴う諸要因による国民意識における宗教的影響力の衰退に伴い、宗教的主題に加えて政治的思想、宗教的思想を複合した国民意識を統一する文化概念の性質を示すことが明らかになった。この思想的変容は、近隣のヨーロッパ諸国における思想的傾向、例えば、特にフランス革命以後、理想主義的観念を体現する社会改革を継続発展するフランス社会などにおける思想的変容とは異なり、宗教的哲学的社会的要素を含む文化教養的思想形成という点において極めて特殊な性質を有すると仮定できる。このイギリス文化概念の性質についての定義とイギリス文学における主題的方向性を明確にするために、特に社会的変革の顕著である18世紀後半から20世紀にかけてのイギリス文化概念の基盤的性質について、文学的社会的政治的資料の分析を通した通事的共時的検証とヨーロッパ近代社会思想の影響関係についての分析がさらに必要である。本研究においてはこれまでの研究結果をふまえ、18世紀以降のイギリス文学において形成されたイギリス文化思想の特質を歴史的思想的に検証し、近代ヨーロッパ社会の思想発展におけるイギリス文化思想の特色とイギリス文学の文学的主題との関連を体系的に明らかにする。

２．研究の目的

(1) 本研究においてはイギリス文学における文化概念の特質を18世紀から20世紀にかけての文学的アウトプットと社会的思想的コンテクストとの関連を歴史的に考察し、ヨーロッパ近代社会におけるイギリス文化概念の構築的性質と意義及びイギリス文学における主題的方向性を解明する。具体的には、18世紀文学においては、ロマン主義文学（コールリッジ、サウジーなど）において、ロマン主義思想の基本的な非国教主義的性質と国家意識との複雑な関連、イギリス社会における自由拡張運動抑圧と国家主義台頭に典型的に見られるイギリスの思想的特質を文学的記述と哲学的思想的資料分析を通して検証し、18世紀後半にかけての近代イギリス社会における思想の特徴が宗教的主題に加え社会的政治的要素を複合的に含む文化的思想としての基盤を形成したことを証明する。

(2) 国民精神を支えるものとしてのイギリス文化的思想形成は19世紀イギリス文学においてさらに明確化する。19世紀イギリス文学（ジョージ・エリオット、マシュー・アーノルド、テニスン、ラスキン等）における文学的記述と宗教的懐疑思想の関連、科学発展と宗教との関係、に見られる文化的思想の特徴を宗教的、思想的、社会的、政治的資料の分析とともに行い、文学における宗教的道徳的主題とイギリス文化思想がいかに構築的関係を示すかについて検証する。文学における文化的主題のアウトプットはさらに20世紀文学において伝統的主題と共存しながら国民意識を統一するものとしての機能を果たすことが明確になる。

(3) 20世紀イギリス文学においては、国民意識を反映するものとしての文学的伝統ないしコモンセンスの形成に関して、前世紀後半以降の社会の不確実感や危機意識を反映する傾向が強まり、1910~40年代の大規模戦争による精神的文化的危機がそれを助長する。他方、ハーディー以降の近代的意識はこの危機を鋭く認識しながらも、他方で多様かつ不安定な価値観も受け入れる感覚を示し、20世紀前半文学に共通する不確実感の主題もこの意味では説明し得る。他、20世紀半ば以降のイギリスの精神的宗教的状況は、アングリカニズムの維持の中でのカトリック的傾向の復活、近代的不可知論等の要素が影響を及ぼし、複雑で多面的傾向を示す。これを背景とし、トマス・ハーディー以降の文学的感覚はフィリップ・ラーキンに連関するイギリスの伝統的主題として発現される。それらは文学と日常性との直結、日常における洞察の瞬間、それらと不安感との関連、土着性あるいは宗教性への郷愁等の主題が展開される（例、ジェフリー・ヒルやシェイマス・ヒーニー等の詩作）。以上の課題を中心にイギリ

ス文学の社会的あるいは文化的側面が示す特質を検証し、合わせてヨーロッパ近代社会におけるイギリス文化思想の体系的発展との比較においてその方向性を検証する。

３．研究の方法

本研究は次の４つの課題を中心に行った。

(1) 18 世紀イギリス文学の文学的主題と社会的政治的変革の関連における思想形成の傾向を検証するため、特に社会的変革の顕著であったロマン主義時代を中心に検証した。ロマン主義文学における非国教主義思想とイギリス国家意識との関連を宗教的思想的資料、政治的社会的資料、当時の哲学的思想の傾向を中心に分析し、18 世紀イギリス社会変革の性質とイギリス文化概念形成との関連を検証した。

(2) 19 世紀イギリス文学においては、特に文学的主題とイギリス文化概念との関連を宗教的懐疑と社会的思想的コンテクストにおいて分析し、イギリス文化概念の特質の過程を検証した。この検証を踏まえ、19 世紀末の文学的状況分析と教養主義の解釈及びイギリス文化概念の思想的性質の再評価と方向性を明らかにした。

(3) 20 世紀イギリス文学においては、文化的主題とコモンセンスの性質を中心に分析した。具体的には、世紀末以来の宗教的懐疑の主題の変容を、ジョージ王朝から戦争詩、また 1960 年代フィリップ・ラーキンを中心とする 20 世紀後半文学における不可知論("agnosticism")との関連において分析した。

(4)上記課題の研究結果に基づき、イギリス文学における文化概念とその思想的特質に関する研究について研究結果を纏めた。上記課題（１）及び（２）研究に必要な文献資料収集及びそれらの分析。課題（１）及び（２）は主に研究代表者が行う。なお、課題（２）及び課題(３)における思想的分析については当該分野の専門的知識を有する研究分担者九州大学名誉教授園井英秀の研究協力を得た。またこの間、関係分野の資料収集及び分析を国内の研究機関（九州大学、北海道大学など）及び国外（大英図書館、ボドリアン図書館など（英国）において行った。また関連分野の学会発表、論文発表(国内及び英国）なども行った。

４．研究成果

(1) 平成 23 年度 ①コールリッジ、サウジー、アナ・バーボルドなどを中心とする文学的記述における宗教的哲学的思想と 18 世紀イギリス社会における社会的政治的コンテクスト（特にイギリス社会における共和主義思想の衰退とフランスにおけるジャコバン体制との思想的乖離）の関連を分析しイギリス文化思想の性質を検証した。

②ジョゼフ・プリーストリ、リチャード・プライス、ウィリアム・フレンドを中心とする非国教徒主義サークルの理想主義とイギリス社会思想の相克を哲学的思想的資料の分析により解明した。

③18 世紀イギリスの社会思想とヨーロッパ近代社会における哲学的思想（カント、ヒューム、ルソーなど）の影響関係と相違の分析を行い、イギリス文化思想の特質を検証した。

(2) 平成 24 年度 ①19 世紀イギリス文学、特にジョージ・エリオット、マシュー・アーノルド、テニスンの宗教的道徳的主題と文化思想との関連の解釈を社会的政治的資料分析を通して行い、イギリス文化思想の基盤的性質についての検証を行った。

②C.ダーウィンの進化論論争（トマス・ハックスリー、サミュエル・ウィルバフォース）を中心にイギリス社会における伝統的宗教観と宗教的懐疑との相克を検証し、イギリス社会における国民意識形成との関連を分析した。

③ジョージ・エリオット、テニスンの文学形成の精神としての宗教的要素の分析を 19 世紀イギリス社会の自然と宗教との関係における神学的解釈と進化論的思想との思想的影響について整理した。

(3) 平成 25 年度 前年度研究の発展的分析として 19 世紀イギリス文学の文学的主題と社会的政治的思想との関連及び文化教養的要素との関連を検証し、19 世紀イギリス文化意識の基盤的性質について分析し、まとめる。具体的には、以下の観点についての分析を中心に行った。①ロバート・オーウェン、ジョン・スチュアート・ミルなどの記述におけるイギリス社会の社会的政治的思想検証と解釈及びイギリス国民意識との関連を検証した。

②マシュー・アーノルド、トマス・カーライルを中心としたイギリス文化批評の思想的分析とイギリス文化の再構築の主題を検証する。

③ ①及び②の検証結果と前年度までの研究結果を相互検討し、19 世紀イギリス文学と文化的思想の特質についてまとめる。

(4) 平成 26 年度 20 世紀初頭ジョージ王朝詩から戦争詩文学についてイギリス文学の低迷とされる評価の基本的性質を再検討し、モダニズムと反モダニズムとの角逐におけるイギリス文学におけるコモンセンスの復活を検証した。①20 世紀前半より 1960~70 年代イギリス文学における宗教的主題の分析、同時期におけるイギリス文化の形成の特質を検証した。

②これまでの研究総括を行い、18 世紀から 20 世紀までのイギリス国民意識形成に果たすイギリス文学の公共的性質についてまと

める。また 20 世紀イギリス文学の思想的検証については、研究分担者園井英秀九州大学名誉教授の研究協力により行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）
① Chine Sonoi, “Romantic Britons: National Identity in the Writings of Coleridge and Southey”, (*The Coleridge Bulletin*, 査読有, Nether Stowey, UK, New Series 41, Summer 2013, pp. 75-84)

〔学会発表〕（計　3　件）
①園井千音,「サウジー後期詩作はロマンティシズムの退嬰を示唆するものか」、イギリス・ロマン派文学研究会九州支部第 17 回冬季研究会, 平成 26 年 12 月 13 日、福岡大学：「福岡市」
② Chine Sonoi, “The Rise of the British National Identity in the Writings of Southey from 1800s to 1820s”, Robert Southey and Romanticism: The Lake School in Context, 平成 25 年 7 月 29 日、Crosthwaite conference centre: 「Keswick, U.K. 」
③Chine Sonoi, “Romantic Britons: National Identity in the Writings of Coleridge and Southey”, Emblems of Nationhood: Britishness 1707-1901, 平成 24 年 8 月 12 日、University of St. Andrews, U.K.:「St. Andrews, U.K.」

６．研究組織
(1)研究代表者
園井　千音（SONOI, Chine）
大分大学・工学部・准教授
研究者番号：70295286

(2) 研究分担者
園井　英秀（SONOI, Eishu）
九州大学・人文科学研究院・名誉教授
研究者番号：00069709